

# 短期大学の地域貢献に関する文献展望

## Regional Contribution of Junior Colleges : A Review of the Literature

稲永 努・藤島 法仁

### I. はじめに

1996年以降、全国にある短期大学はその数を減らし続けている。そのため、各方面から短期大学再生のための提言がなされている。高島・館（1998）は、「短期大学は生涯にわたる高等教育のファーストステージである」というコンセプトの「短大ファーストステージ論」を展開している。また2001年に文部科学省が提出した「大学を基点とする日本経済活性化のための構造改革プラン—大学が変わる、日本を変える—」では、コミュニティカレッジという概念が用いられている。関根（2002）もまた、短期大学教育の再生を検討するには、ショートサイクルとしての「大学」、つまり短期「大学」としてコミュニティカレッジを構想する方向をおいてほかに、再生の道はないと指摘している。

こうした背景から、短期大学教育の再生を図るキーワードの一つとして、「地域貢献」が注目を集めている。文部科学省は2013年度から、各大学・短期大学等を対象に「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」を公募している。これは、大学等が自治体と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・地域貢献を進める大学を支援することで、課題解決に資する様々な人材や情報・技術が集まる、地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化を図ることを目的としている。三瓶（2010）は短期大学の役割について、地域貢献を教育・研究と並んで「第三の使命」と位置づけているが、この大学COC事業はまさに短期大学における地域貢献を促進する可能性を秘めている。

このように短期大学における地域貢献の必要性は揺るがないものであるが、実際にどのようなことをすることが地域貢献に当たるのか、また全国的にどのような地域貢献が行われているのかについては、研究的な側面からは押さえられていないのが現状と言える。今後、短期大学の地域貢献を促進していくためには、まずはこれまでの研究的な基盤をきちんと押さえることも重要になると考える。そこで本研究では、これまで報告されてきた短期大学の地域貢献に関する文献を展望することを通して、短期大学の地域貢献をカテゴリー別に整理することを目的とする。また、文献整理した素材を分析することを通して、短期大学の地域貢献の未来像について提言したい。

### II. 方法

#### 1. 文献検索方法

文献検索については、国立情報学研究所の文献検索システム「CiNii」を用いることとする。フリーワード検索にて、「短期大学」「地域」という用語を入力して検索したところ、215件がヒットしたため、文献の出版年の設定と用語の絞込みを実行した。出版年については、2000年から2014年まで（同年2月末現在）とした。用語については、フリーワード検索ではなく詳細検索に切り替え、タイト

ル名に以下の3パターンの用語を入力して抽出を試みた。

- (1) 「短期大学」「地域」「貢献」
- (2) 「短期大学」「地域」「報告」
- (3) 「短大」「地域」

上記の検索条件に従って、「抽出された文献数」を以下の表1に表示した。この中からさらに、研究として短大における地域貢献についてまとめられている文献に絞るために、共通する文献、学長等のインタビュー録、講演録を除外する操作を加え、最終的に抽出された文献数が右端の「最終文献数」である。「最終文献」は20件となった。

表1 検索条件と抽出された文献数

	タイトル検索	出版年	抽出された文献数	最終文献数 (計20件)
1	「短期大学」「地域」「貢献」	2000年～2014年	18件	14件
2	「短期大学」「地域」「報告」	2000年～2014年	24件	4件
3	「短大」「地域」	2000年～2014年	23件	3件

## 2. 文献分類方法

抽出された「最終文献」について、次の3つの分類を施すことにする。

- (1) 実践報告に関する文献
- (2) 教育や生涯学習に関する文献
- (3) 調査等に基づく考察あるいは提言を有する文献

「最終文献」20件のうち、(1) 実践報告に関する文献は10件で、内訳は学生主体の実践報告が4件、教職員主体の実践報告が3件、上記以外の実践あるいは学生・教職員の共働とみられる実践が3件であった。(2) 教育や生涯学習に関する文献は3件で、出張講座や市民公開講座などに関するものになる。(3) 調査等に基づく考察あるいは提言を有する文献は7件であった。

この3つの分類に従って、以下にそれぞれの文献の概要を紹介することにする。その際、地域貢献に関する記述を特に重点的に抽出した。

## Ⅲ. 文献概要

### 1. 実践報告に関する文献

#### (1) 学生主体の実践

①長野県短期大学の上原(2008)は、地域における複数の大学・短期大学生によって構成される合同サークル「チーム'95」の実践について報告している。「チーム'95」には、信州大学、上越教育大学、長野大学、国士舘大学、東洋大学、大東文化大学、長野県短期大学、上田女子短期大学、長野県福祉大学校、上田工科短期大学校の学生が所属している。活動は多岐にわたり、たとえば長野県教育委員会が実施している不登校の小・中学生を主体とした自然体験活動へのボランティアスタッフとしての参加などがある。上原(2008)はそれら活動の効果として、継続的な社会的貢献だけでなく、若者の学習や研究活動、および進路形成にも効果的であると言及している。

②香蘭女子短期大学長の坂根（2009）は、学生による特徴的な地域貢献活動を二つ紹介している。一つは、地域の高齢者を短期大学に招き、学生と一緒にパソコン実習等を行う「すこやかカレッジ」で、もう一つは、学生が小学生を指導して、一日かけてカフェエプロン等を作成する小学校とのジョイント授業である。また、教員による一般住民を対象とした公開講座の紹介もある。

③茨城女子短期大学の神永（2009）は、短大に隣接している幼稚園において、ゼミの学生（2年生）が企画運営をして未就園児とその保護者と関わりを持つ「おやこひろば」の実践について報告している。これはゼミ活動を中心として実施し、学生の保育経験の場としての役割と、未就園児の遊び場の確保や子育て支援としての地域貢献の役割を目的としている。

④岡崎女子短期大学の山田ら（2012）は、短大ダンス部による「岡崎城能楽堂お江戸でダンス！」の上演までの部員たちの行動をふり返り、地域交流を通じた学生の育ちの検証を試みている。これによると学生の育ちには、「見通しを持った行動」「場に応じて臨機応変に対応する力」「感謝の気持ちを持つ」「地域とのつながりを紡ぐ力」「真似ることを学ぶ力」の5つが期待できるとしている。ここでは4点目の、学生が広報活動や地域の子どもたちと交流する体験を通して、地域の方々との「つながりを紡ぐ力」を獲得できるという点を特記しておく。

## (2) 教職員主体の実践

①山陽女子短期大学の井芹ら（2005）は、地域住民から栄養知識の伝達を求められる機会が多くなったことを契機として、「思いっきりこども教室」といった教職員を主体とした料理教室の開催や、「いま、注目されている栄養素と食品」講演会などの開催について実践報告している。

②日本赤十字広島看護大学図書館所属の渡辺（2008）は、短期大学図書館研究にて、小規模大学図書館でできる地域貢献について報告している。ここでは、卒業生を対象に文献検索の最新情報を提供する講習会である「図書館は今！」の実施、高校生を対象にオープンキャンパスに図書館が参加した形態の講習会である「大学を知ろう！」の実施、中学生を対象に図書館の仕事をもっと知ってもらおうという職場体験である「ようこそ司書の世界へ」の実施などが紹介されている。加えて、地域の小学生からの要望からヒントを得た今後の構想として、小学生の夏休みの自由研究に図書館を活用してもらうことはできないかを検討している。

③京都経済短期大学の下村（2009）は、京都経済短期大学洛西・地域研究センターでの活動を報告している。2007年度から、なんきんはぜの会と京都京洛ライオンズクラブと共同した洛西ニュータウン内を流れる小畑川の清掃活動と、その後外部講師を招いた環境保全勉強会を実施している。

## (3) 上記以外の実践あるいは学生・教職員の共働とみられる実践

①新見公立短期大学の古城ら（2004）は、過疎化が進む地元の阿新地域における地域貢献として、3つのプロジェクトに取り組んでいる。1つ目は、2000年の鳥取県西部地震後から教職員と学生がチームを組んで定期的に被災高齢者宅を訪問し、健康相談や家事援助を行う「千屋震災訪問ボランティア」。2つ目は、高齢者がいつでも利用できるITを活用した健康相談事業である「新見介護ネット」。3つ目は、地域住民が訪れやすい場所にデイサービス・センターを開設し、在宅高齢者と家族介護者の健康相談や生活支援、教員・学生と地域住民との交流企画である「サテライト・デイ」。これら3つのプロジェクトを通して、学生への教育効果だけでなく、高齢者の健康・生活支援としての成果も期待できると考察されている。

②長崎短期大学の佐竹ら（2007）は、前年度よりゼミの総合演習の時間を活用してサツマイモ作

りを行い、短大がある椎木町子供育成会の子どもたちを招待してのイモ掘り会や焼きイモ会の実践について報告している。1年目は教員主体で準備し、2年目はできる限り学生主体で行うようにしたとある。また、「夏休み親子クッキング」や「お菓子作り教室」などの取り組みについても紹介してある。

③光塩学園女子短期大学の石川ら(2010)は、「子育て支援」、「特別支援学級で学ぶ子の支援」、公開講座と図書館の開放による「文化支援」の3つの地域支援について報告している。1つ目の「子育て支援」では、スタッフが運営している子育て支援室「マンマ」の利用状況や、学生が授業で4名ずつ「マンマ」に入り、子育て体験や母親との交流が行われてことが報告されている。2つ目の「特別支援学級で学ぶ子への支援」では、「マンマ」をさらに発展させたいという短大側の思惑と「障害のある子を対象とするものがないか」という地域のニーズが合致して始まった「親子でパンとお菓子を作ってみませんか」という企画が紹介されている。

## 2. 教育や生涯学習に関する文献

①松本大学松商短期大学部の山添(2005)は、定員割れせず、募集定員を超えて安定的に学生を確保していくために、「地域密着型学生募集活動の課題」について考察している。その中で、高校生に向けた「出張授業」や「模擬講義」を紹介しており、学生募集活動としてだけでなく、高校生に対する社会的活動としても意義の高いものであったとしている。

②長野県短期大学長の上條(2006)は、「本学は学生を『地域貢献』の可能な人材を育成することが、何よりの『地域貢献』である」とした上で、「出張講座」「市民カレッジ」「県民カルチャー自主講座」といった本学独自の「教育サービス」もまたもう一つの重要な地域貢献であると述べている。

③桜の聖母短期大学の三瓶(2010)は、自身が主担当として運営している「南相馬市リーダー養成講座」において、市民の生涯学習を牽引し地域づくりを推進できる人材、つまり「生涯学習プログラマー」を少数精鋭式で養成した実践について紹介している。ここで強調されているのは、生涯学習は個人の生きがいのための学習と言われるが、もっと先に進んで、短期大学の「第三の使命」である地域貢献という視点から、個々人の生きがいや学びがいを地域に還元するところまで考えることができるリーダーづくりが必要であるという点である。

## 3. 調査等に基づく考察あるいは提言を有する文献

①大阪女学院短期大学長の関根(2002)は、短期大学教育の再生の可能性を検討するには、「大学」とは異なる別種の「短期大学」として構想されるのか、それともショートサイクルとしての「大学」、つまり短期「大学」として構想されるべきかなどさまざまな視点から短期大学教育について整理している。結論として、浮かび上がってくるコミュニティカレッジ像は明らかに「大学」であり、短期「大学」としてコミュニティカレッジを構想する方向においてほかに、再生の道はないと指摘している。

②三重短期大学長の雨宮(2004)は、短大改革の方向性について、四年制大学への編入、資格取得に重点を置いた教育の重点化、編入学のバイパスとしての役割という3つを提示している。そして、広い意味での教養教育こそが企業が求める職業能力の育成につながるとしている。またもう一つの側面として、地域において大学の果たす知的拠点としての役割がますます重要になり、地域の側でも大学をどのように活用するかという発想が必要になると提言している。

③大阪キリスト教短期大学の林(2008)は、地域振興に貢献するキリスト教主義保育園の機能拡

大と経営改善についての研究の中で、地域社会と保育園は自律的有機的オープンシステムとし、キリスト教主義の長所を導入して、地域活性化を目指さねばならないと述べている。

④岡崎女子短期大学の守山ら（2008）は、当大学の卒業生に短大教育に関する評価と生涯学習（教育）についての意向把握するための質問紙調査を行っている。その結果、多くの卒業生が子育て支援のマンパワーとして地域貢献する意欲を見せていることが把握できたとしている。

⑤京都短期大学の江川ら（2010）は、回想的レビューを用いたイベントの企画・実践による地域貢献とその効果を評価している。イベントとは、短期大学近隣の高齢者施設への学生の敬老の祝賀訪問を指す。その結果として、利用者の満足度や次回への期待度の高さが示されている。

⑥短期大学コンソーシアム九州（2010）は、佐賀女子短期大学、香蘭女子短期大学、精華女子短期大学、東海大学福岡短期大学、長崎女子短期大学、長崎短期大学、西九州大学短期大学部、福岡工業大学短期大学部、福岡女子短期大学から成り、地域に貢献する短期高等教育機関として短期大学の役割や機能の明確化と強化を図り、短期大学教育の再生を促進することを目標としている。ここでは、短期大学教育の再生のためのさまざまな取り組みがなされているが、地域貢献という視点では、高等学校と短期大学のキャリア教育接続プログラムの開発や、地域関係者と意見交換しながら地域が必要とする人材養成プログラムの開発などが紹介されている。

⑦大阪女学院短期大学アドミッションセンター長の落合（2012）は、短大関係者が高校との連携・貢献を失念すれば、地元の文化力などの発展・発信には貢献できないと指摘している。

#### IV. 考察

##### 1. 文献展望全体を通して

短期大学の地域貢献に関する最終文献 20 件のうち、14 件が短期大学紀要での報告であった。ここから先、20 件の文献を引用する場合は、「Ⅲ. 文献概要」で用いた番号に準じ、以下のような番号を付することにする。たとえば「1. 実践報告に関する文献」の「(1) 学生主体の実践」①上原（2008）の文献を引用する場合は、「1 - (1) - ①」とする。

最終文献 20 件は、そのほとんどが単著あるいは同じ所属の共著によるものであったが、複数の短期大学グループによる報告（1 - (1) - ①長野県短期大学など、3 - ⑥短期大学コンソーシアム九州）も見られた。また 20 件のうち、実践報告に関する文献が半分を占め、教員だけでなく学生を巻き込んだ活動、あるいは学生主体の活動も多く報告されていた。さらに 20 件のうち、4 分の 1 にあたる 5 件が学長による執筆であった。これは、1996 年以降短期大学数が減少し始め、短期大学の将来を憂う気持ちから執筆に至ったのではないかと推測される。

##### 2. 地域貢献活動の発端の分析

それぞれの短期大学あるいはグループによる地域貢献活動は、どのような経緯から始められたのだろうか。20 件の文献をそれぞれ分析してみた結果、地域貢献活動の発端は、(A)「短期大学から地域に向けた発信」、(B)「地域のニーズに短期大学が応える活動」、(C)「地域と短期大学のニーズが一致した活動」の 3 つに分けることができた。

(A)「短期大学から地域に向けた発信」は、短期大学にある資源を活かして地域貢献へとベクトルを向けた活動である。教員主体のものとしては、2 - ②長野短期大学の「出張講座」「市民カレッジ」「県民カルチャー自主講座」などの“教育サービス”や、2 - (2) 日本赤十字広島看護大学図書館による地域の小学生、中学生、高等学校生や卒業生を対象とした図書館情報の提供などが挙げられる。

また、学生主体のものとしては、1-(1)-④岡崎女子短期大学ダンス部による「岡崎城能楽堂お江戸ダンス!」の取り組みなど、学生が持っている資源を生かした活動もある。これらの(A)「短期大学から地域に向けた発信」のメリットは、教員や学生がもともと持ち合わせている資源を活用できるため、短期大学ができるところからやるという点で大きな労力がかからないと言える。

一方(B)「地域のニーズに短期大学が応える活動」は、地域側のニーズに短期大学が合わせていく部分が生じてくるため、ニーズのすり合わせが大変になる。1-(2)-①山陽女子短期大学では、地域住民から栄養知識の伝達を求められることが多くなったことを契機として、教職員主体の料理教室や講演会を開催している。また3-⑥短期大学コンソーシアム九州では、地域関係者と意見交換しながら地域が必要とする人材養成プログラムの開発に取り組んでいるという報告もある。

(C)「地域と短期大学のニーズが一致した活動」には、1-(1)-③茨城女子短期大学の「おやおひろば」の実践があり、学生の保育経験の場としての役割と子育て支援等の地域貢献としての役割が一致した活動となっている。また1-(3)-①新見公立短期大学では、過疎化が進む地域と被災地域という地域側のニーズと短期大学の教職員が持ち合わせている体力・知・サービスなどの資源とが密接に絡み合っている。このように、(C)「地域と短期大学のニーズが一致した活動」の次元まで来ると、一方向の地域貢献にとどまらず、短期大学と地域が共存共栄するというビジョンが垣間見えてくると考える。

### 3. 地域貢献の未来像に関する提言

これまで文献展望及び地域貢献活動の発端の分析を行ってきたが、ここからは、これまでの分析を踏まえて短期大学の地域貢献の未来像について考えてみたい。ここで重要になってくるのが、「何をするのが地域貢献になるのかがはっきりと定義されているわけではない」という点である。この点から考えると、地域貢献はある種これから無限の発想力を持って広げていけるとも言えるが、逆にビジョンが漠然としているために今後の課題も見落とされていると言える。そこでここでは、地域貢献の今後の課題を含めた未来像について、以下の5点について提言したい。

#### (1) 研究業績を積み上げる必要性

上述のように、地域貢献の一つとして市民公開講座などの“教育サービス”が各短期大学で行われている(1-(2)-①~③、1-(3)-①~③など)。この手法は、短期大学教員が所有している知的資源を活用するため、もっとも専門的で、かつ取り掛かりやすい活動であろう。しかし短期大学では、4年制大学と比較するとそれほど研究に重きが置かれていない傾向にある。大阪女学院短期大学長の関根(2002)が、短期大学教育の再生のためには、ショートサイクルとしての「大学」つまり短期「大学」としてコミュニティカレッジを構想する方向をおいてほかに再生の道はないと述べているが、今後“教育サービス”を基調とした地域貢献活動を広げるためには、教員は平素の研究活動にもより力を注ぎ、研究業績を積み上げていく必要があるということになる。ただし、これには教員の現実的な制約が付いてくるので、以下で改めて取り上げることにする。

#### (2) 学生の地域参加のバリエーションを広げる必要性

文献概要の1-(1)-①~④のように、学生主体の地域貢献活動も報告されている。1-(1)-①、④のように、サークル活動を母体としているものや、1-(1)-②、③のように、学生が主体となって企画運営している活動もある。これからの地域貢献を考える場合、このような学生主体となって行っている活動のバリエーションを広げていくことが大切になってくると考える。たとえば、サークル活動に限らず、学友会や卒業生で構成される同窓会を活用するのも一手であろう。もちろん、

これらの活動を行っている短期大学もあるだろうが、研究として報告はされていない。さまざまな短期大学が「研究」として実践報告を上げることで、また新しいバリエーションが生まれる可能性もあるのではないだろうか。

### (3) 地域のニーズを拾う必要性

長野県短期大学長の上條（2006）が「本学は学生を『地域貢献』の可能な人材を育成することが、何よりの『地域貢献』である」としているように、地域貢献可能な人材を排出することも地域貢献の一つであろう。しかしそれだけにとどまらず、「地域の側でも大学をどのように活用するかという発想」（雨宮、2004）も今後の地域貢献を考えていく上では必要となるだろう。

先進的な取り組みとして、先ほど（B）「地域のニーズに短期大学が応える活動」で紹介したが、短期大学コンソーシアム九州の地域が必要とする人材養成プログラムの開発などがある。この他にも、（C）「地域と短期大学のニーズが一致した活動」で紹介した新見公立短期大学での実践も実に興味深い。しかし、ここで問題になってくるのは、地域が何を短期大学に求めているのかという地域のニーズをいかにして拾っていくのかという方法論の問題である。

地域のニーズを拾う方法として、たとえば子育て講座や市民公開講座などのイベントを開催したときにアンケートを実施する、あるいは短期大学卒業生にアンケートを実施することは可能であろう。しかし、地域の多くの方々のニーズを把握することはとても難しい。そうすると、このようなアンケートを地道に継続していくことはもちろんであるが、たとえば短期大学に「地域交流センター」を新たに設置して、スタッフが地域のあらゆる行事や施設に向向いて、信頼関係を深めながら地域のニーズを汲み取っていくのも一案であろう。いずれにしても、ステークホルダーのニーズを拾っていくことが肝要になると考える。

### (4) 学内業務と地域貢献を両立するための工夫

以上のように、短期大学の地域貢献の未来像に関して3つの提言をさせていただいたが、今後の地域貢献活動を考える上でもっとも大きな課題と言えるのが、短期大学内の業務と地域貢献活動を如何に両立できるか、である。言わずもがな、短期大学の業務は4年制大学のそれよりも多い。加えて近年では、学生の低学力化や多様化等に伴い、学生一人ひとりに合ったきめ細やかな指導や支援、マナー講座や低学力者への補講など、多忙さは年々増している。その中で地域貢献活動を行っていくことは非常に困難になってきている。

たとえば臨床心理学を専門としている第一筆者の場合、スクールカウンセリングや子育て相談会の開催、子育てやストレスマネジメントに関する講演会や研修会の開催、小・中・高校における出張授業、学校教員や保育者との事例検討会の開催など、さまざまな地域貢献活動が考えられる。しかし、先ほどあげたような学生一人ひとりへのきめ細やかな指導や支援も大切にしたいため、地域貢献活動は二の次にしなければならないというジレンマに陥っている。また、先に教員が研究業績を積み上げていかなければならない必要性にも触れたが、これも同様に二の次にしなければならない状況である。

このように見ると、短期大学の地域貢献の重要性は全国的にあらゆるところで叫ばれているが、今後の地域貢献を考えていく場合には、学内業務と地域貢献を両立するための工夫が必要になってくると考える。出来る範囲で行うことも一案、新たなスタッフを雇用して「地域交流センター」立ち上げるも一案、学内業務を削減するも一案。それぞれの短期大学の事情に応じて、学内業務と地域貢献を両立するための工夫が取られるようになると、地域が必要とする人材の育成と地域のニーズに応じた地域貢献もまた、両立されていくのではないだろうか。

#### (5) 学生が主体的に地域貢献できるための工夫

4点目の「学内業務と地域貢献を両立するための工夫」は、あくまでも教員主体の地域貢献を考える上での提言である。地域貢献の究極の未来像を言えば、現状では理想論になってしまうが、学生一人ひとり、あるいは卒業生一人ひとりが地域にどうコミットしていくかを主体的に考えられるようになることではないだろうか。そのためには、4点目で述べたような教員サイドの環境整備が行われることが前提条件になるが、まずは教員が地域とつながり、そこに学生が地域と接触できる機会を設け、そして学生に「自分だったら自身の特長を活かして、地域にどのように恩返しができるか」について考えさせていくことも大切になってくると考える。これがうまく機能するようになると、地域と短期大学の双方向の交流もますます増え、地域に根ざした短期大学の実現にもつながるのではないだろうか。

#### 【文献】

##### (1) 「最終文献」として整理した20件

- 雨宮照雄(2004) 短大の未来－教養教育の充実と地域貢献－ 世界平和研究 30(3), 22-29.
- 江川美由紀・森永夕美・後藤多美子(2010) 回想法的レビューで取り組んだ京都短期大学の地域貢献と授業の評価 京都短期大学紀要 38(1), 15-25.
- 林雄太郎(2008) 地域振興に貢献する私立幼稚園とキリスト教主義保育園の機能拡大と経営改善に関する研究 大阪キリスト教短期大学紀要 48, 121-132.
- 井芹蓉子・中尾信子・寺岡千恵子・新屋有紀子・松本綾(2005) 短大における地域住民への影響・健康知識の普及のあり方－開かれた短大をめざして－ 山陽女子短期大学研究紀要 27, 33-36.
- 石川益・重野淳子・南部ユンティアンしず子(2010) 光塩学園女子短期大学の地域支援に関する報告－子育て支援と特別支援学級で学ぶ子の支援－ 光塩学園女子短期大学紀要 11, 73-97.
- 上條宏之(2006) 大学と地域社会(2)長野県短期大学と地域貢献 信州自治研 167, 22-29.
- 神永直美(2009) 保育者養成短大における地域子育て支援の取り組み 茨城女子短期大学紀要 36, 62-79.
- 古城幸子・木下香織・栗本一美・石橋由美(2004) 在宅高齢者支援に関する短期大学の地域貢献－阿新キャンパスシティ構想の実現－ 新見公立短期大学紀要 25, 187-194.
- 守山均・松永愛子・白垣潤(2008) 岡崎女子短期大学の教育力と地域貢献のあり方に関する調査研究－幼児教育学科、初等教育学科卒業生に対する意識調査の結果から－ 学術教育総合研究所所報 1, 1-20.
- 落合正教(2012) 短期大学の現場から つれづれ短大論③「エネルギー問題」と「核家族」という二つの核－地域貢献を具体化するために－ 短期大学教育 68, 198-201.
- 坂根康秀(2009) 地域に貢献できる短期大学を目指して 短期大学教育 65, 71-73.
- 三瓶千香子(2010) 南相馬市に生涯学習プログラマーをつくる－短期大学の地域貢献の一例として－ 桜の聖母短期大学紀要 34, 105-134.
- 佐竹要平・平田安喜子(2007) 食育を通じての短大と地域子どもたちとの交流事業の展開－保育学生・製菓コース学生の専門性を活用して－ 長崎短期大学研究紀要 19, 43-52.
- 関根秀和(2002) 地域に貢献する短期大学教育－リベラルアーツ系短期大学の立場－ 現代の高等教育 444, 24-28.
- 下村泰彦(2009) 京都経済短期大学洛西・地域研究センター活動報告－小畑川清掃活動&環境保全

勉強会実施報告－ 洛西地域研究 5, 45-62.

外岡慎一郎 (2007) 敦賀短期大学地域総合研究所プロジェクト「敦賀屋」調査報告 (第1次) 敦賀論叢 22, 31-40.

短期大学コンソーシアム九州 (2010) 短期大学コンソーシアム九州の挑戦－平成二十一年度「大学教育充実のための戦略的短期大学連携支援プログラム」に採択された「地域の人材育成に貢献する短期大学の役割と機能の強化のための戦略的短大連携事業」取組報告－ 66, 39-43.

上原貴夫 (2008) 地域における複数の大学・短期大学生が結ぶ人間関係のもとで成長する若者－若者が合同で行うサークル活動が果たす地域貢献と、その活動が学生自らの教育・研究活動と進路形成におよぼす影響に関する研究－ 人間関係学研究 15(1), 32-42.

渡辺さゆり (2008) 「探しものは何ですか？」－小規模図書館ができる地域貢献とは－ 短期大学図書館研究 28, 139-142.

山田悠莉・祝田学 (2012) 岡崎女子短期大学ダンス部による「岡崎城能楽堂お江戸ダンス！」に関する報告－地域交流を経験することによる学生の育ち－ 学術教育総合研究所報 5, 57-66.

山添昌彦 (2005) 地域密着型学生募集活動の課題－地方短大における活動実績の分析を通して－ 地域総合研究 5, 221-246.

## (2) その他の文献

文部科学省ホームページ「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/kaikaku/coc/](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/coc/)

館昭 (2002) 短大からコミュニティ・カレッジへ 東信堂

高島正夫・館昭 (1998) 短大ファーストステージ論 東信堂